

## 東洋を舞台にした「ジョージ・オーウェル」 と「E. M. フォースター」

清 水 輝 雄

ジョージ・オーウェル (George Orwell) と E. M. フォースター (E. M. Forster) はその生い立ち、性格、人生観、作風等ほとんどすべての点において両極に立っていると言えるほど対照的な作家であるが、この二人がビルマとインドという英帝国支配下の植民地を舞台にして物語や登場人物等多くの点で非常に似通った小説を書いているのは誠に興味深い。オーウェルの「ビルマの日々」'Burmese Days' とフォースターの「インドへの道」'A Passage to India' がそれである。「ビルマの日々」は小説ではオーウェルの最初の作品であり、「インドへの道」は円熟期に到達したフォースターの最後の小説であるから、両作品の間には人生の読みの深さ、表現の練達度等において差異があるのは当然であるが、それ以外に両作者の東洋人観や英国の植民地統治に対する批判等を通して両者の思想傾向や作風の特色がうかがわれて示唆に富む作品である。

この両作品の比較は既に<sup>(1)</sup>批評家達によって断片的に取上げられているので、それらを参考にして次の各節において、総合的な比較を試みることにした。

### 〔I〕 「ビルマの日々」と「インドへの道」の内容

両作品を比較する手がかりとして先ずその内容の簡単な紹介をすることにする。

#### (a) 「ビルマの日々」

この物語の舞台は当時英国の植民地でインド政庁支配下の一州であった

ビルマ北部の小さな町キヤウクタダ (Kyauktada) である。ここでも他の町村と同様に警察や行政を司る高級役人や木材会社に勤務する少数の白人達が「クラブ」と呼ばれる白人達だけの特殊社会を作り、勤務時以外はいつもこの「クラブ」に集って飲酒やトランプにふけている。「クラブ」は言わば白人達の「精神的城塞」(spiritual citadel)<sup>(2)</sup>である。そんな雰囲気の中にただ一人異色のイギリス人フロリー (Flory) がいる。彼はビルマに来て15年になる中年の木材会社員で、高等教育は受けていないが知性的で読書を好み、他の白人達が支配者の権威をかさに着て、現地人に対して高圧的に振舞っている中で彼だけは現地人に好意を持ち、町の市場に出かけて気軽に話しかけたりする。特にインド人医師のベラスワミ (Veraswami) とは親友で互に訪問し合って食事を共にしたり、議論をしたりする。彼は他の白人達と同調できず、時折英国の植民地統治を批判したりするので彼等から異端視され、反感をもたれている。しかし彼は気が弱くて積極的に立向う勇気がなく、多くの場合心ならずも彼等に追随している。

この頃インド政庁からこれまで現地人に門を閉ざしていた「クラブ」に彼等をメンバーとして加えるよう通達が来た。「クラブ」のメンバーに加えられることは現地人にとっては最高の榮譽であり、ベラスワミ医師が有力な候補者と考えられた。しかし奸智にたけ、賄賂を用いて町の副保安官にのし上り、「人間の姿をしたワニ」(a crocodile in human shape)<sup>(3)</sup>とおそれられていたウ・ポー・キイン (U Po Kyin) がメンバーの地位を切望し、あらゆる策略でベラスワミ医師を中傷して失脚させようとする。フロリーは医師を支援したいと思うが、やはり積極的に乗り出す勇気がない。

この時白人社会に一つの大きな変化が起きた。ある白人宅にその姪のエリザベス<sup>(4)</sup>がパリーで孤児になって引取られて来たのである。彼女が散歩の途中水牛に邪魔されて立往生しているのを助けたことからフロリーは彼女と親しくなるが、彼女は彼と性格がまるで違い読書の趣味もなく、他の白人達と同様現地人に接するのをひどく嫌う。フロリーはそれに気付かず彼女を現地人の野外劇を見につれ出したり、バザールの中国人商店を訪れたりして彼女の気嫌を損じてしまう。それで彼女が狩猟に興味をもってい

---

ることを知って今度は狩猟に誘う。その時思いがけず一匹の豹が飛び出し、フロリーが危険を冒してやっと射止める。エリザベスは彼の勇敢な行為に感激して二人の仲は親密になる。

その頃悪党のポー・キーンがライバルのベラスワミ医師を失脚させるため、彼が反英運動を扇動しているという噂を流したので、貴族出身のイギリス人士官ベラール（Verrall）を隊長とする憲兵隊がこの町に派遣される。エリザベスは放蕩者とも知らずこのベラールに夢中になってフロリーを見捨ててしまう。やがてポー・キーンが仕組んだ芝居じみた反英暴動が起り、憲兵隊や白人達が鎮圧に向いて逃げ出す現地人に発砲し、その一人を射殺した。その親戚が復讐としてその発砲した白人を襲って殺害したため、白人達と現地人の間の対立感情が激化した。その最中に一人の白人が下校中の高校生達にからかわれて、かつとなり笞でなぐりつけて一人の生徒を失明させてしまった。その晩現地人達が挙げて「クラブ」を包囲して投石し、その白人を引渡せとせまり白人達はパニック状態となる。これまで臆病者と軽蔑されていたフロリーが突然飛び出し、裏の河を渡って警察隊に連絡して危機を救った。この行動でフロリーは一躍英雄視されるようになり、憲兵隊長のベラールが転出したこともあってフロリーとエリザベスの間のよりが戻り、ベラスワミ医師の地歩も固められた。

しかし策謀家のポー・キーンも負けてはおらず、フロリーの弱身をつくことを思いついた。以前フロリーは現地人の娘を妾にしていたが、エリザベスと親しくなるとこの女に金を与えて手を切り、その恨をかっていた。そこでポー・キーンはこの女に金をやって手なづけ、白人達が教会の礼拝に集っている処をねらって彼女にぼろ服をまといせ、ひどい化粧をして送り込み、フロリーに捨てられてこんな姿になったと大声でわめき立てさせた。白人達の前で大恥をかかされたフロリーはすべての希望を失い真直ぐに帰宅してピストルで心臓を射抜いて自殺する。

彼の死は事故死として取扱われ、エリザベス以外の白人達にはほとんど衝撃を与えなかったし、そのエリザベスも間もなく白人の一人と結婚する。フロリーに支持されていたベラスワミ医師も他の地区に左遷され、悪党の

ポー・キーンだけが切望していた「クラブ」のメンバーに選ばれ、数々の栄誉を手に入れ、賄賂でかせいだ金で充ち足りた生涯を終るとというのがこの物語の結末である。

(b) 「インドへの道」

この物語の舞台も英国の植民地であったインドのチャンドラポア市 (Chandrapore) で、ここでも白人達は「クラブ」を中心にして生活しており、現地人の社会とはほとんど接触しない。ただ一人市立大学長のフィールドディング (Fielding) だけは現地人に好意をもち、その社会にとけ込もうと努めている。特に市立病院のインド人医師アズイズ (Aziz) とは親密で、互いに訪問し合う間柄である。そのために彼は他の白人達から反感をもたれて彼等の社会から浮上った存在になっている。ここでもインド政府から「クラブ」のメンバーに現地人を加えるようにという通達が来て、フィールドディングがアズイズ医師を推薦しようとするのに対して他の白人達はこの医師が反英的な言動をするという口実でそれにはげしく反対する。

このような状況の中で当市の治安判事ヒースロップ (Heathlop) の許にその母のムーア (Moore) 夫人が彼が求婚している女性アデラ (Adela)<sup>(5)</sup> を伴って英国から到着する。二人の女性は共に現地人に好意的で、特にアデラは積極的に「本当の姿のインドを見る」 (“I want to see the real India.”)<sup>(6)</sup> ことを望んでいる。ふとしたことでムーア夫人はアズイズ医師と知り合い、すぐに心が通じあった親友となる。アズイズは多額の費用を負担して二人のイギリス婦人を近郊のマラバー (Marabar) 洞窟の見物旅行に招待する。しかしその洞窟内の神秘的な雰囲気であデラはもうろうとなり、アズイズ医師から暴行されかけたという錯覚に陥り、逃げ帰って告訴する。ムーア夫人はアズイズ医師の人柄から彼の無実を信じ、フィールドディングも弁護に尽力するが、アズイズは逮捕されて裁判にかけられる。日頃からこの医師の人徳を慕う現地人は回教徒もヒンズー教徒も日頃の対立を忘れ、団結して立上がり市中は緊迫した空気に包まれる。しかし裁判の席でアデラは急に態度を変え、自分の錯覚であったと認めて告訴を取り下げたため事態は一変してアズイズは釈放され、市中は歓喜のデモで沸き返る。

しかしその後間もなくフィールドディングがアデラと結婚するという噂が流れたため親しかったアズイズとフィールドディングの仲が冷却してしまう。アズイズは白人との接触を避けるようになり、やがてある藩王国<sup>(7)</sup>の侍医になって転出し、フィールドディングもインド政庁の視学官となって当市を去る。数年後アズイズが侍医となっている藩王国でヒンズー教のクリシュナ神生誕の祭典が行われる日にたまたまその地方を視察旅行中のフィールドディングが訪れ、アズイズと再会してアデラとの結婚の噂がうそであったことが分かって、両者の間に友情が復活する。しかしアデラ事件の傷跡は深く、かつてのような心の通い合った親密さは取り戻せず、インド人と白人の融和のむずかしさを改めて思い知らされる。しかし最後の離別の場面の印象的な描写によって読者の心には両者の将来の融和の可能性が余韻として残る。

## 〔Ⅱ〕 両作品の比較

上記の簡略な内容紹介によっても両作品が非常に多くの類似点をもつことが容易に察知できよう。先ず共に英帝国のインド政庁統治下の地域を舞台とし、そこに居住する少数の白人達は「クラブ」という城塞にこもって現地人とはほとんど接触しようとはせず、支配者として高圧的態度で横暴な行為に終始し、現地人から強い反感を買っている。その白人達の中にそれぞれ一人の異端者がいて積極的に現地人と接触し、親近感をもたれている。特に知識階級であるインド人医師と親交をもち、彼等を「クラブ」のメンバーに加えようと尽力して他の白人達と対立している。そこへ突然外部から白人の若い女性が舞い降りて来て雰囲気をかき乱す。それが直接、間接の原因となって今まで抑圧されていた現地人の反英感情が燃え上がり、陰悪な情勢となる。その時平常は無気力な臆病者と蔑視されていた異端者の白人が活躍してその危機を乗り越える。しかしその後も英帝国の植民地統治にはほとんど改革が加えられることもなく、彼等の活躍も成果を生むことなく物語は終る。

このように両作品の間には余りにも類似点が多いため、両者が規を一に

する作品と見られがちであるが、注意深く読み比べてみると多くの点で対照的とも言える程の差異が見出される。それらのいくつかを取上げてみよう。

(a) 視点の相異

先ず二人の作家は植民地の実態を見る視点が全く違っていると言える。オーウェルはビルマを「内面」から見ており、フォースターはインドを「外面」から見ていると言ってよいであろう。オーウェルはビルマ人の生活の中に入り込んで、そのきびしく、醜い裏の面まであばき出しているのに対して、フォースターはインド人の生活の表面に表われた、よそ行きの面を描いている。言葉を換えて言うとオーウェルのは現実に基づいたドキュメンタリー的作品であり、フォースターのは美化されたビジョンの世界である。

これは彼等の経歴や性格を考慮すれば全く当然のことと言える。オーウェルはインド政府の官吏を父としてインドで生れた生粋の「アングロ・インディアン」(Anglo-Indian)<sup>(8)</sup>である。彼は2才で英本国に帰って教育を受けているので少年時代はインドとの直接の接触はないが、イートン校を卒業するとすぐビルマの警察に勤務することになり、5年間警察官として現地人と直接対する立場にあり、それが如何に神経と良心をすりへらす困難な仕事であるか身をもって体験している。<sup>(9)</sup>「ビルマの日々」はその体験からの産物である。

一方フォースターは裕福な大伯母の援助で恵まれた青春を過し、ケンブリッジ大学卒業後も定職につくことなく文筆活動ができた。彼がインドに興味を抱くようになったのもインドの上流階級の出身でオックスフォード大学に留学したインド人青年マスード (Syed Ross Masood) と知己になったことが切っ掛けで、その青年に招待されて1912年から3年にかけて賓客としてインドに滞在し、各地を見物した。さらに第一次世界大戦をへだてて1921年今度は藩王国デワスの国王に招かれて秘書のような役割で8ヵ月滞在した。この二回の訪問と彼がインドに興味を感じて読んだかなり多数の書籍からの知識が「インドへの道」の素材となっている。彼が見たイン

---

ドは賓客としての外面からの——むしろ上から見おろしたと言う方が適切であるかも知れない——観察に基づくインドであり、彼が見聞した素材を彼の得意とする想像力を駆使して醸成したものと言える。

この視点の相異は両作品の導入部からもはっきりうかがえる。「ビルマの日々」はキャウクタダの町の治安判事補の地位にある現地人ポー・キインの紹介で始まる。彼は奸智にたけ、若い頃小役人になるとライバルの役人達を中傷したり、賄賂で手に入れた金をばらまいたりして今の地位まで出世した人物で、重罪犯人の罪を見逃してやってその代償として給料も払わずに召使として追い使っているという悪らつ振りが描かれている。幾分の誇張があるにもせよ、自国人を犠牲にして支配者に取り入り、自分の栄達をはかるといふ植民地によく見られるタイプの人間を身近に見て、苦々しく思っていたので冒頭に取り上げたのであろう。一方「インドへの道」ではインドに到着して間もないムーア夫人が夕方散歩の途中回教のモスクの前を通りかかり、興味を感じて何気なく中に入る。その時中に居合わせたインド人のアズイズ医師が「回教の作法に従って靴をぬぐように」と注意すると彼女は「靴はぬいで上がりました」と答えた。アズイズは今までに体験したことのないこの白人婦人の謙譲さに心を打たれて話がはずみ、たちまち心の通じ合った友人となり、アズイズは彼女に「あなたは東洋人です」という讃辞を呈する。そして彼女はその後のアズイズの行動に強い影響を及ぼすことになる。

一方では栄達と蓄財に狂奔する人間の醜悪さ、他方は夕暮の神秘的なモスクの中で静かに語り合うインド人と白人婦人の姿、この導入部の対照は両作品の基調の違いを端的に示すものと言えるであろう。

#### (b) 登場人物の対比

前述の通り両作品には似通った役割を果す登場人物が何対かある。その若干のものを取上げて対比してみよう。

##### (1) フロリーとフィールディング

この二人は共にアングロ・インディアンの社会からはみ出して現地人に好意をもち、その中にとけ込もうとしているイギリス人である。彼等は他

の白人達の高圧的な態度に反撥して現地人に同情を示す点では共通しているが、この二人もその性格や行動には対照的とも言える程のへだたりがある。フロリーはビルマ時代の若いオーウェルの思想・感情の代弁者と見られている人物である。彼が現地人と親しく、彼等から好感をもって迎えられていることはエリザベスを野外劇や中国人の商店に案内する場面の描写からよくうかがわれる。それでいて彼は私生活ではうしろめたさを感じながらも現地人の召使を手荒く扱ったり、現地人の娘を金で買取って妾にする等他の白人達と余り変わらない生活をしている。また親友のベラスワミ医師を「クラブ」のメンバーに推薦するに際しても白人社会から孤立するのを恐れて心ならずも反対決議に署名してしまうという意志の弱い人間である。一方「インドへの道」のフィールディングも作者フォースターの代弁者と考えられる人物であるが、彼の方は高い教養を身につけた知識人で、自分の信念に従って毅然と行動する。「クラブ」のメンバーにアズイズ医師を推薦する時でも自分の提案が反対されるとさつさと「クラブ」から脱退して白人社会と絶縁してしまう。彼も現地人と広く接触しているが、フロリーの場合のように現地人の社会にとけ込んでいるという印象は受けない。アズイズ医師と親交があったが、彼等の間には医師とムーア夫人の間のような深い心のつながりは生れない。フィールディングとアデラが結婚するという噂が流れただけで両者の友情は切れてしまう。このようにオーウェルが描いたフロリーの方は人間臭を多分にもつ普通人として親近感が感じられるが、フォースターのフィールディングからは理想化された抽象的な人間像しか心に残らない。

## (2) 二人のインド人医師

「ビルマの日々」のベラスワミ医師と「インドへの道」のアズイズ医師は医師としての技倆がすぐれていて民衆の信望を得ている点では共通しているが、その性格、思想等についてはこれまた著しい差異がある。既述の通りフロリーが他の白人達の生活態度に批判的であることから疎外され、「クラブ」から脱れてよくベラスワミ医師の許を訪れていた。そんな時に政治問題に話が及ぶと英国の植民地統治を口を極めて非難攻撃するのはイ

ギリス人のフロリーの方で、彼をなだめ英国の統治はビルマに法と秩序をもたらし、資源を開発してビルマ人の生活水準を上げたと讃辞を呈するのはインド人のベラスワミの方だった。彼は口先だけの追従を言っているのではなく心からそう信じているのだ。一方アズイズ医師の方は熱烈な回教徒で往時のムガル王朝の栄光にあこがれ、何日の日か自分達の手で白人達をインドから追出す幻想を抱いている。勤務先の市立病院でも上司のイギリス人軍医に反撥してその怒りをおかしている。英国から来訪したアデラ達をマラバー洞窟見物に招待した時彼女に暴行しかけたと告訴されると無実と判明しても白人達との接触を嫌って藩王国の侍医に退いてしまう。英国の高圧的統治の下に置かれた現地人医師としてはベラスワミ医師がとった態度の方が自然な姿であろうと思われる。ここでもフォスターはアズイズ医師を理想化してヒーローに仕上げているという感じがする。前に述べたインドの上流家庭の出身で英国に留学してフォスターの親友となり、彼をインド旅行に招待した青年マスードがアズイズ医師のモデルであると言われ、それもこのような人間像を作り出した一因であると思われる。

### (3) エリザベスとアデラ

両作品共突然外界から飛び込んで来て白人社会に波瀾を巻き起すイギリス人女性がいる。「ビルマの日々」のエリザベスと「インドへの道」のアデラである。この二人も対照的なタイプの女性である。エリザベスは母と二人でパリーに住んでいたのが、母が死んで孤児になり、止むなく叔父に引取られてビルマに来たのであって、始めからビルマに何の興味も持っていない。それどころか現地人を嫌悪している。フロリーは彼女に心をよせ、彼女と結婚してビルマで平穏な家庭生活を営むことを願う。そのために何とかして彼女をビルマ人の生活に親しませようと現地人の街につれ出すが、嫌悪の情を増すだけで現地人を評して

'How revolting ugly these people are, aren't they?'

(この人達は何とひどく醜いことでしょう) <sup>(10)</sup>

と言う仕末である。彼女はフロリーに狩猟に伴われてからは彼に心を惹かれて婚約寸前にまでなるが、貴族出身の青年士官が出現するとすぐそちらに心を移し、その士官が転出するとまたフロリーに戻り、彼が現地人の妾に白人達の前で恥をかかされて自殺すると程なく別の白人と結婚してしまうという軽薄な女である。彼女の場合も誇張されていてやや不自然な感じを禁じえないが、彼女のような立場に置かれれば保身のために無理からぬ行動であったと同情できる人物である。

一方アデラの方は治安判事のヒースロップに求婚され、インドの彼の生活の実態を見て諾否を決めようという意図で、彼の母ムーア夫人と一緒に来訪した知性的な女性で、来訪前からインドに興味をもっている。前述の通り彼女ははっきりと「本当の姿のインドが見たい」と言ってインドの民衆に積極的に接しようとする。しかし好意的な意図をもっていながら、その知性が邪魔となって彼女は希望するように民衆の中に入り込んで、その心を把握することはできなかった。そしてフィールドイングから

‘You have no real affection for Aziz, or Indians generally…’. The first time I saw you, you were wanting to see India, not Indians, …’

(あなたはアズイズいやインド人全般に本当の愛情をもっていない。初めてあなたに会った時あなたはインド人でなくインドを見たがっていました。)<sup>(11)</sup>

と言われる。アデラの方はフォースターの理念の化身のような人物になっていてエリザベスのような人間臭が感受されない。

### 〔Ⅲ〕 両作家の作風の特徴

次に両作家の作風の特徴に眼を向けてみよう。既にこれまでの記述で大体察知されるように、オーウェルはリアリズムを信条としその描写は詳細、緻密を極めているが、創造的想像力が不足しているというのが定評であり、一方のフォースターはその創造的想像力が特に豊かで正に対照的な作家と

言える。そして同じような舞台、同じような登場人物によって構成されたこの二つの作品は両作家の特色を比較検討するのに最適のものと言える。その対照が顕著に表われている場面を取上げてみよう。

共にその後の物語の展開に大きな転機となった事件である。「ビルマの日々」の方はフロリーがエリザベスを現地人の街につれ出してすっかり気嫌を損じた後、名誉回復を目指して彼女を狩猟につれ出す場面である。ジャングルの描写から勢子達の追出しの模様、打ち落した獲物の鳥の説明等が10数ページにわたって記述され、最後に思いがけず豹が飛び出し手もとに猛獣用の弾丸がなくて命がけで射殺する場面となる。

Flory levelled his gun and fired at four yards' distance. The leopard jumped like a cushion when one hits it, then rolled over, curled up and lay still. Flory poked the body with his gun-barrel. It did not stir.

'It's all right, he's done for,' he called.

'Come and have a look at him.'

(フロリーは銃をかまえ、4ヤードの距離から発砲した。豹はクッションをたたいた時のように飛び上がり、ころがって体を丸め、静かに横たわった。フロリーは銃身でその体をつついたが、動かなかった。

「大丈夫だ。死んじやったよ。見に来てごらん。」と彼は叫んだ。)<sup>(12)</sup>

オーウェルの狩猟の描写は眼の前に見ているように詳細であるが、何となく報道記事を読むような印象を受ける。この豹の射殺の場面でも射殺された豹は一個の物体がころがっているような感じで命がけで豹を射止めた感激が充分伝わらず、感銘が薄い。

「インドへの道」でこれに対応する場面はアズイズ医師がマラバー洞窟見物にムーア夫人とアデラを招待する時の情景である。アズイズ医師は彼等を歓待しようとして莫大な経費をかけ、乗物に象まで借り出して洞窟見物に出かけたが、アデラは一つの洞窟に入ると奥の方からひびいてくる神秘的な反響音で、もうろうとなり、アズイズ医師に暴行されかけたという

錯覚に陥り、逃げ帰って医師を告訴したため、物語は意外な展開を見せることになる。この洞窟内の描写はフォースターが得意とする創造的想像力の神髄が発揮されたものと言えよう。

There are some exquisite echoes in India... The echo in a Marabar cave is not like these, it is entirely devoid of distinction. Whatever is said, the same monotonous noise replies, and quivers up and down the walls until it is absorbed into the roof. 'BOUM' is the sound as far as the human alphabet can express it, or 'bou-oum', or 'ou-boum',...utterly dull...And if several people talk at once, an overlapping howling noise begins, echoes generate echoes, and the cave is stuffed with a snake composed of small snakes, which writhe independently.

(インドにはいくつかの微妙な山びこがある。…しかしマラバーの洞窟の山びこはそれらと違って全く区別がない。何が言われても同じ単調な音が答え、それが壁面を上下にふるえながら伝わり、天井へ吸い込まれる。「ポーウム」が人間の文字が表わしうる限りで最もその音に近い表現である、あるいは「ポーウ、オーム」か「オー、ポーウム」かである。…全くにぶい音だ。そしてもし数人の人が同時に話すと、重なり合ったうなり声が聞え始め、山びこが山びこを生み、洞窟は別々にのたうち廻る小さな蛇が集ってできた一匹の蛇でふさがれてしまう。)<sup>(13)</sup>

この二つの場面の描写を比較すれば両作家の作風の差異がはっきりとうかがわれるであろう。

#### 〔IV〕 英国の植民地支配についての両作家の見解

この二つの作品は共に英国の植民地を舞台にしているのだが、両作家は英国の植民地支配についてどのような見解を抱いていたのであろうか。

先ずこの時代の作家や知識人達がこの問題について抱いていた見解の簡潔な概観を与えてくれる批評家の文章を紹介しよう。

---

In the nineteenth century, thoughtful, critical people were frequently enthusiastic partisans of imperial expansion;...But as the twentieth century opened, this same class, the artists and intellectuals of the age, increasingly came to believe that imperial rule, if inevitable in the short run, was an inglorious enterprise that deformed both those who ruled and those who submitted. Such writers as E. M. Forster, George Orwell, Leonard Woolf, Joyce Cary, and Evelyn Waugh all saw the imperial system at first hand, and all returned to write of its narrowness, blindness, and brutality. Their novels and essays record not only their own disillusionment, but the growing skepticism of many colonialists and imperial civil servants.

(19世紀には思慮深い、批判的な人々でもしばしば帝国主義的拡張の熱心な支持者であった。…しかし20世紀が始まると同じ階層の者、即ちその時代の芸術家や知識人達の間で帝国主義的支配はさし当ってはさげられないものであっても、支配者と被支配者の双方をそこなう不名誉な事業であると信じる者が次第に増加してきた。E. M. フォスター、ジョージ・オーウェル、レオナルド・ウルフ、ジョイス・ケアリー、イヴリン・ウオーのような作家達は皆自分で直接帝国主義機構を観察して帰国し、その狭量、無知、残虐性について書いている。彼等の小説やエッセーは彼等自身の幻滅だけでなく、植民地主義者達や植民地の官僚達の増大しつつある懐疑心も記述している。)<sup>(14)</sup>

この記述の通り、英国の植民地支配についてはオーウェルもフォスターも共に批判的態度をとっており、現地での体験を通してアングロ・インディアン達が現地人から遊離し、高圧的な態度で彼等に接して反感を買っている点を特に非難している。しかしその他の点では両者の見解にはかなりの距りがあることがこの二つの作品から感得される。

先ず、オーウェルの場合であるが、前述の通り彼は生粋のアングロ・インディアンの家庭に生れ、英本国での学校教育を終えるとすぐビルマの警察官に任官した。そのため彼は他のどの職種の白人達よりも現地人、特に

下層の大衆に接する機会が多く、前に述べた通り内面から彼等の抑圧された悲惨な状況をいやと言う程見せつけられた。しかも彼はそのような立場には凡そ不適任なせん細で感受性の強い性格の持主であったから、自分が彼等を苦しめる統治機構の一員であることを深刻に悩み、罪の意識にさいなまれることになった。彼のエッセー「象を打つ」(Shooting an Elephant)は苦しかった彼の心境の告白と言える。しかし一方ではビルマ人の僧侶が露骨に反抗的態度を示すとはげしい敵意を感じ、彼等の腹に銃剣を突きさしてやりたい気持になる。<sup>(15)</sup>これは実際に植民地で支配者としての生活を体験したことのある者なら誰でも抱く心境であろう。このように一方では压制者としての罪の意識にさいなまれ、他方では現地人との融和に努めても彼等の強い反抗心に対しては施すすべのない無力感に打ちひしがれた。そして逃げ道のないペシミズムに陥り遂に警察官の職を退いて帰国してしまった。帰国後彼がパリーやロンドンで下層労働者の中に身を投じて、その苦勞を体験しようとしたのもビルマ時代の罪の意識への償いを意図したものであり、さらに彼が「ビルマの日々」を書いたのもその延長線上にある行為であるとする批評家の見解は当を得たものと思う。<sup>(16)</sup>この作品の主役であるフロリーは前述の通りオーウェルの見解を代弁するものと考えられるが、最後に彼が絶望してピストル自殺をしたのも罪の清算の意図を暗示するものと解釈できる。

フォースターの方もオーウェルと同じく英国の植民地支配に批判的であることは前述の通りであるが、両作家の見解にはかなりの差異が認められる。フォースターの場合は外部からの訪問者の眼で見た植民地で、その描写にはオーウェルにない心のゆとりがあり、さらに彼が信条として堅持している「友情」(friendship)が「インドへの道」でも基調となっていて、オーウェルにない暖か味が感じられる。モスクの中の初対面でアズイズ医師とムーア夫人の間には強い心のきずなが生れ、それがずっとアズイズ医師の心の支えとなり、アデラの錯覚から暴行未遂の罪で告訴され、裁判にかけられると彼のムーア夫人に対する信頼感が彼を敬愛する一般民衆の心にも伝わり、彼等はムーアの名をなまめてヒンズー教の女神の名と結びつけ

た「エスマス・エスマーア」(Esmiss Esmoor)を反対デモの合言葉とし、法廷の内外はその呼び声で埋まった。アズイズ医師はフィールディングとも深い信頼のきずなで結ばれていてフィールディングは彼の弁護に尽力したが、裁判後アデラと結婚するという噂が流れて一時アズイズとの友情が冷却してしまいが、数年後に再会してその誤解がとけて友情がよみがえる。そして梗概の処で既に述べた印象的な結末の場面となるのである。二人が別れに際して一しよに乗馬の遠乗りに出かけて、フィールディングがアズイズに

‘Why can’t we be friends now?…It’s what I want. It’s what you want.’

(「何故我々は今友人になれないのだろうか。それが私の望むことだし、君も望んでいることなのに」)  
と言う。しかし彼等を取り巻くすべての事物、大空までが

‘No, not yet.’

(「いや、まだ、まだ」)<sup>(17)</sup>

と冷く答えるという表現でこの物語は終るのだが、この言葉とはうらはらに読者の心にはこの兩人が強いきずなで結ばれており、やがてその友情の輪が次第に広がって英印両国民の融和実現への淡い、しかし暖かい希望の余韻が残るのである。「ビルマの日々」の絶望感と比べると「インドへの道」には弱いながらも救いの道が残されている。

## む す び

「ビルマの日々」と「インドへの道」は前述の通りその環境、登場人物、物語の展開等多くの類似点をもっているが、その反面色々な点で対照的とも言える程の差異があることを検討してきた。この二作品は文芸作品としての価値の評価には大きな格差があるが、両作家の特色が余す所なく発揮

されている点で非常に興味深く、英国の「植民地文学」の歴史を考えるに際してこの時代（20世紀初頭からの四半世紀）の植民地を舞台とした代表的作品として忘れることのできないものとなっている。

#### 注

‘Burmese Days’は B. D. ‘A Passage to India’は P. I. と略記。

使用テキストは何れも Penguin Books 版。

- (1) (a) ‘A Reader’s Guide to George Orwell’ の p. 68.  
(b) ‘Movements in English Literature: 1900—1940’ の p. 133.
- (2) B. D. p. 17.
- (3) B. D. p. 43.
- (4) エリザベス
- (5) アデラ } この二人だけは便宜上姓でなく名を使用。
- (6) P. I. p. 25.
- (7) 藩王国 インド各地に散在する土着民の王国，土候国ともいう。国内の自治を認められてイギリス総督の支配下にあった。（「世界史辞典—数研出版」による）
- (8) インド在住のイギリス人すべてを通称アングロ・インディアンと言っていた。
- (9) この体験はオーウェルのエッセー「象を打つ」(shooting an Elephant) によく描かれている。
- (10) B. D. p. 113.
- (11) P. I. p. 253.
- (12) B. D. p. 163.
- (13) P. I. p. 145.
- (14) ‘Kipling and Conrad’ p. 153.
- (15) 「象を打つ」から引用。
- (16) A Reader’s Guide to George Orwell pp. 65—66.
- (17) P. I. p. 317.

#### 参考文献

- (1) A Reader’s Guide to George Orwell (Jeffrey Meyers)
- (2) Movements in English Literature: 1900—1940 (Christopher Gillie)
- (3) Kipling and Conrad: The Colonial Fiction (John A. McClure)
- (4) E. M. Forster’s Passage to India (Robin Jared Lewis)

- 
- (5) Focus on Forster's "A Passage to India" (Edited by V. A. Shahane)
  - (6) E. M. Forster's India (G. K. Das)
  - (7) ジョージ・オーウェル (上下両巻) B.クリック著 河合秀和 訳